



うぐさ

猫向中納言光隆

えんま

光隆

光隆

① 近江守の二位家隆ハ十位王守に終り終る

其の七首は奇として廻向を終る終る終る

其の一首はひれひれひれひれひれひれ一首

其の一首はふしの里にうらまを波の入りぬきつる

寶日上人といふ人の常れた奇と一首と日不作

詠じて性生乃奇懐をさあまひうらま其理不遠

おまゝのやうにけさ人の家みけはるる養由

藝とつゝ孝廣が跡はけふかか何事をするま

あつていゝとさうとせし文を無奇はこのひそぐ





舜帝のくた八愷八元とみせて十六族の文士召えりて
 しがめし頃順が右親衛源將軍始談論語をた
 職列_ニ虎牙_ニ維拉_ニ武勇_ニ於漢_ニ四七將_ニ
 學_ニ抽_ニ麟角_ニ逐_ニ味_ニ文章_ニ於魯_ニ二十病_ニ
 しが書をける文武共ちりゆ也又唐太宗隋の世に
 有く政と定終るる時魏徵房玄齡等勅問しりて
 て守_ニ文章_ニ創_ニの_ニと_ニ分_ニて文武_ニれ_ニと_ニ退_ニる_ニ事_ニと_ニぞ_ニお_ニり
 く公_ニの_ニ方_ニに_ニ付_ニて_ニ諱_ニい_ニり_ニあ_ニる_ニ事_ニと_ニぞ_ニお_ニり
 向_ニく_ニ勝負_ニと_ニあ_ニる_ニ事_ニと_ニぞ_ニお_ニり
 其_ニ徳_ニ多_ニく_ニ因_ニり_ニた_ニ氏_ニ傳_ニ云_ニ賈_ニ太_ニ主_ニと_ニ人_ニと_ニら_ニき_ニり_ニて

へあつらふらうちうらわの女思ふはくもて三年の間物
 らだつていざらふけしむ男難とていふはれどあはれ
 あり物よあつらふらうちのまてと成らて思ふは
 くのこれ此妻りけく打殺くわつていざらふら
 高倉院清時公敵のまに鶴の鳴らるはわきまをかり
 とていざらふらうちのまてと成らて思ふは射
 させらるるまてと成らて思ふは射させらるるま
 たり此由公作らるるに思ふは宣旨と兼らるる中
 けつて書ていざらふらうちのまてと成らて思ふは
 園深く雨と入らうちのまてと成らて思ふは
 我とていざらふらうちのまてと成らて思ふは

かけたはらうちのまてと成らて思ふは射させらるるま
 思ひて去らるるまてと成らて思ふは射させらるるま
 一のわやゆらうちのまてと成らて思ふは射させらるるま
 けつて書ていざらふらうちのまてと成らて思ふは射
 とり事と成らるるまてと成らて思ふは射させらるるま
 郭公名はくもて思ふは射させらるるま
 頼政とていざらふらうちのまてと成らて思ふは射
 うらうちのまてと成らて思ふは射させらるるま
 やけらうちのまてと成らて思ふは射させらるるま
 昔、養由雲外射馬、今、頼政雨中、得、鶴

感を以て種々の形政養同の如に征矢と取具して持
 たりたる後より人其同くればも不足りたるは其の
 事なり人を以てんがとあかりとてを答ふる
 僧徒乃勤より八家乃修学一院陀羅尼行者は華持
 者等也大青後世の御因なりとても公請より其の
 今世の終りつて天竺震旦へてを往ら我朝より
 弘法傳教是智證の四大師を以てりあり
 て菩薩和尚号は家々く教聖人於者乃其然わら
 して振舞其證多ういれ面々其靈験行徳とあり
 能くして中よりと振出るといふは管経の徳神

感の例粗とらりきりとしてたうらあるも以て粗く

廿七 村と清時三條中納言朝忠也希は信いりり弟朝成
 けりて昇殿ゆりて小板敷り信と主上小部より清
 覚とらりとの息まひりてあつげとるり節候之由也
 多く平云人狐給くけき内裏しひをげりり候り
 くり形も勿り其業あてんりり

廿八 白河院清信の御野好喜といひりりて後職焉よ
 れり付て放鷹樂をとんと狐留り候と二人ありと
 り大種惟孝が外は此樂と習侍り共ありりり
 みりりて井戸の次官あさしりりりり管経者といひて惟孝

かし共よはるごと由作りまればかたねの装束して樂人母
 らりたるればともいひてさ面自りりてさう今白の宴いそ
 しき事ありけきば舞人も物のよもはさうられきあし
 五人芝草高草則草成兼経遠今一人をさうざうけきば
 ち草子おま童うて年十四かりはりて藏人取て
 俄り男あおしてさうらさうり時の人面白かりてさ
 けりかきりてさう事いあさしひささう道のものか
 わらぬと角みよとてさあされさういひてさ事といひさ
 かしふ大井川り舟樂乃何角松川乃側よ井り入る
 えとさうざうとさういひ龍歌り惟草角松く鷗首よい角次

かくてえ樂松でど人これを知いさういひてさ失れして
 ざりもろ娘乃而自後の不覚多し人たさうさう今度の
 清會よは土清門右大長序経をさう種多り其詞云
 境 近 都 城 故 無 車 馬 之 煩
 路 經 山 野 故 有 雉 兔 之 遊
 とぞあはれさう奇もサかくやえさう中い清製さう勝
 まこととけか

大井川寺記伝を尋来さうわし此山のお樂松そとんあ
 通後中納言後拾遺とえさういれさう何入なりさう也

堀川院清乃同好者者と由白何院ふりさうさあし

亦終に其河の土津門右府ありて人仰るるに扈從を以て和
奇序なりと云ふも書く今其人の口はあり

瑤池周穆之昔策駿馬而無取之休
冷河漢武之秋携佳人而不能忘

かゝる詠書はさきやまき天皇又下りて勢給者なり
た府をそのと独りてを給る此句も同序也是はか
とて國威な府よりを合を給る河和奇序神
ありて詩序に似たりと下りけしは我詩序と不可書
我和奇才学を此付くは人といふてとて言給る

聖綱々年々して好帥は成く下るる河白河院

中民部は信也

相子色ハ
萱草色又
わびれ草子
とも云ふと
忘るる長
鈍色ハ
あぢ衣
共變服
用

年高くなりて遠く極く如くそくかからん程の秘
事ありて此の傳えをうける因石とて事也と作ら
けしは河後重通なりふかこのおとく傳え墨竹は其
器よりそは伝はるる孫といふ小女秘事の意は拂て
教とて作りしもの事なむ事ありて事とて言ふと
下りてうらうのらけりてかくま給る事いふは皇
かゝるごとくある事なりやと云ふては小女伝はる程と
同に事ありうらまはるる色ありけしはか相子色の穠
てあづいられさるるまきとてくは合より三曲まで物伝
くしていさくうけりてさるるなりて

鈍色衣

喪服の

相子

いしらふらふらけきびしき門の音がらり中いゆりてのりれ
 かりとらり此小女ハ尾張守高階為遠ガ女時輔のひとられ
 殿さうほり待賢門院よまうて尾張とて作らる年ふけ
 多は尼よ成て大急にぞ住らる二条院の法師れきま
 了石多れども龜居てほりりれいふまはとて忘らる由
 してまうばりりり此尾張女房よてまうらるる何より道
 んありて止観ふゆんをさしありて歩けりてこられき一人と
 異して大急好良仁重のゆりりつむむいふえらりあり
 とれさ紀くの中ハ本遠院へまうらりけるふ例何の程
 して清堂乃局へ入るる例何とそむわんとありけるやと

了女房の中ハさうさうゆりり学問のふだりありて身
 をゆりりてかく常に清らるいざいざあをむむして教ふるま
 事へう種々れども聖のゆりありてさうまや立給りんどもん
 りさうらばゆりま聖とてありまうらりらばかく清らるる
 ハ今ハされくてやさるさうさうとて案づらりやふ例何とそ
 障子ぬりあきをせりて只今の中ハさうさうま事
 学問の退かゆりりさうさうま事
 れらりけるさうさう女房出ありて終りま事ハ住らり
 三 十月がらり月わらりま事ハ長経位心をさうさうとてさうさう位心
 長朝長院禪慶禪長慶樂人と四人宰相中お隆綱

管絃者かんげんはわらわしわらわすたものそ付つふ又おの俊明しゅんめいを各
 車くるまに乘のりて五郎ごろう令婦みづめ世伝よつたふむたてあつらひあつらひのあふり
 みくろみくろ樂うたお戸とをいへるれば物ものあはれ也い板いた屋やあふり
 ころおれ志のこのぶとこけり月つきのこすお内うちまでくはたせよ
 ちうちうそちの儿こ帳ちやうをわらわしおとあしんしころ物ものれりたより
 引ひしおすころり秋あき風かぜ樂うた三さん反はん種しゆ合がふはくして萬まん秋
 樂うたの序しよより五帖ごていまでありありあふりおさぬ人ひとさ
 此こうら俊明しゅんめい何事なにごとにもしずくちりさうりたれば大目おほめり
 かわりといへしころりあふりいんもも精ま進しんして神かみ伝でん志しあふり
 ころり隆たか綱つな俊明しゅんめいもいきて舞ま々々り樂うた終はつりて

院いん禪ぜん慶けい禪ぜんふらんらん初はつ子し弘こう引ひ家け信しんのあつれれ尼に云い琴きん弘こう
 引ひ信しんの長なが後ご琴きんと引ひ人ひとを流ながしむむして樂うたの何なには
 精しやう進しんころり夜よ明めいふたれど目めおちとすらんぞころり
 中ちゆうにこのあつらひの命いのち婦めづめとてと樂うた系けい殿てんの女むすめ禪ぜん乃
 女むすめ房ぼうわらわしあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
 ころりころりのはらとこやうたさうりあふりあふりあふりあふり
 ころり流ながをせりす徳とくさんさんあふり
 天てん治ち二年にねん八月はつがつ十日じふにちあふりあふりの以もつ伏ふく見みの斎さい文ぶん路ろふたにお
 ころりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
 花はな園えん内うちふたあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
 崙らん仁に親しん王わう四し子し



文の程は月のはぬをたをた捨てて各おし中しきおち
 ぬし女房筆と所方やうくかき合くるすす川の清か
 互も号下は通くぬけ伊勢までけつさしとていふこと
 乱るり遊いあしむとせとてあまされは海くつらるるが
 事として大なる催馬樂公といひ内なる狂言といふもの
 内は筆の程はきくづりつらるるいふことしき樂
 教をけくけけるやふ内大なるたつた物つとまれば
 さねよとして物つたつたれたつたをさねよとして詠
 まける久しとあつたまにみお情くつとつら
 唐國より衛霊公といふ人晋の玉へ行道は濃水と云

入りし玉の宮殿玉乃樓閣ねむるに舞臺のよひ十二人
の妓女舞おのく白衣と着る樂の奏舞ねとこの
どうふふ玉の宮殿とてすのんげい雪風あぐらに神みまえ
くやうう二階乃宮殿わうううまは玉の宮殿あま
目しあてしれど玉の宮殿とておとて一人れあて是を
見るるとて物ね音舞乃すごこの方ねまてりを
及流いどおのくえいくらぬづくやがされるくも妙備
わがう舞ねんえとてげうて踊り多しふきう帝此曲
をふふとあぐら舞るくあまう盤渉調の奏きり霞裳
羽衣とてこれら足かり中やどづりなみいころふ

よるに始終のたは樂也とてらう但此年平ゆがつるれ
おの同録に霞裳羽衣の壹越調の樂也本の名は
ハ壹越婆羅門といふら同帝れこれ天寶年中に
とてのらぬ改く霞裳羽衣とみだく終く下尋

墨 同帝月乃夜角吹多いころふ其舞の鴛乃が
いど術者これをやして龍の尻うとらして多し龍乃
舞くくしる符は作く是は封じてりうこのよる帝儀
しるのすくしるせしてえ吹流つと宮中さうだて飲
く事世は閑えく天下乃熱きうう是は彼術者と
まなして我術のさううわる事はゆらうて符は破つて

くは帝ののびくは成るいこり思ふうぞ清き苗の
徳をいりぬつる事志るとぬいまる

聖王尊君がそのいりよあさみりて物の哀れなるごとく

くも雍門と云人よりれく現る公引國人涙をせむさびと

つらみなり君が云雍門よく現るを引く我の事なりん

とついでひるせらふ先世中れ事常と云けいあてゆり

みあふ人へをりてい合をていささとの夢をりうごらん

涙せく久く家士賦序に陸士衛が書は

落葉 俟て微風 以て 墮 風力益 寒

孟 嘗 遭 雍 門 而 泣 琴 曲 已 未

又橋在列が物家けはあはをくら序代よ孟嘗君を

樂橋泣雍門之微琴と書は是也

秦穆公の女味玉のちくいちく簫とむく周靈王太子

玉喬のぬく笛を吹あつて風を付く或の鶴ののりて

ふくらたがく仙を得て去るくらうきく系竹の妙なり

あ治世ようかい傳事とさしやつら狸現る治世音と云

事瓜以言が作

雲 調 黃 德 軒 岳 遠 風 奏 南 薰 舜 道 興

唐高宗れ后則天皇后の書りつら

皇 禹 聞 泉 臺 之 聲 遂 登 仙 録

帝軒張洞庭之樂一早叶真源

これい音楽孤は仙家人中にこれをもてあまび体土
天よりもつれをさしたすやとてさうさうさうさうさう
後をさうさう

①行成の道風が後を継てりてさうた終書たさうさうさう

殿と人のさう殿とて扇合とらさうさうさうさうさうさう

玉珠のさう金銀とさうたて我をさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

紙さうて樂府の要文を真草に打まぎてあま書てあ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

これとて清文札とさうれさう彼乃孫の帥中細言伊房

とてれいけりさうさうさうさうさうさうさうさう

現よりてさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あんとてさうさうさうさうさうさうさうさうさう

経てほよさうさうの外よ公家より此社より一切経を安置

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

けるふ此帥の子孫乃中よりさうさうさうさうさう

さける額者とてさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



大武位おほぶたいつそくのわづれなる道了みちりょうして伊豫園いよのゑんと浄明社じやうめいしゃれ庵室あんしつ
 のりて彼社かのやしろの額がくとうれしむらむらとせめてぬりける
 ① 渡通わたぬちのまごころ鞠まりをおもひころ其徳そのとくやいりいん
 わりにしのま鞠まりの精せいころの柝たたくの枝えだよあつれてとそ
 くりまごころいりる小思こし年十二と斗ととを青色あざいろれ唐装束たうさうそく
 していみくさけくげとぞありきる何事なにごととこのしむせ
 めるい庭にわにさつりてうやれととあつらとげらうあぞ
 せきかゝりてくはさるゝいとありてとさればまじり学者がくしや
 い牛毛うしげのこゝ得者とくしやの鱗角りんかくのぶくゝとありた亭てい大武
 資通すけぬちの程ほど色いろよみぬけらうとと見みにんかと入いる集あつ人ひとよ

とてして志げし指^{さし}さすなりとてなりとてなりとて念^{ねん}珠^{しゆ}と
せど毎^{まい}持^ぢ佛^{ぶつ}堂^{どう}に入^いり佛^{ぶつ}あして程^{ほど}程^{ほど}とて人^{ひと}も扱^{あつか}
をこもそそ是^{こゝ}孤^こ廻^{かい}向^{かう}しなりなりよとあよとあはかり
くりとれども帝^{てい}より玄^{げん}象^{しやう}と終^{つひ}りて引^ひくりてとて
えざりとれは濟^{せい}政^{せい}之位^ゐ是^{こゝ}孤^こ開^{かい}く玄^{げん}象^{しやう}とて服^{ふく}まに
くはといふ終^{つひ}りなは彼^か資^し通^{つう}の予^よ子^し信^{しん}の志^しとて
えざりとれは濟^{せい}政^{せい}いつる事^{こと}あり今^{いま}も其^{その}詞^{ことば}の如^{ごと}くとて
何^{なに}の人^{ひと}といふ是^{こゝ}は人^{ひと}の未^ま至^しなり乃^{すなは}ち事^{こと}もやわが
けられ彼^か玄^{げん}象^{しやう}よりな唐^{たう}の程^{ほど}程^{ほど}の師^し劉^{りう}次^じ郎^{らう}ら
程^{ほど}程^{ほど}也^{なり}深^{ふか}平^{ひら}の帝^{てい}清^{せい}河^か掃^{そう}の貞^{てい}般^{ぱん}が唐^{たう}へ海^{かい}して

程^{ほど}程^{ほど}といふ所の程^{ほど}程^{ほど}あり此^{こゝ}程^{ほど}の甲^{かう}れけざりたり
よそ有^ありし事^{こと}も唐^{たう}人の信^{しん}とて是^{こゝ}程^{ほど}程^{ほど}の丈^{たけ}也^{なり}
いといふる或^{ある}人^{ひと}説^{せつ}云^い玄^{げん}象^{しやう}の玄^{げん}上^{じやう}宰相^{しやう}の程^{ほど}程^{ほど}也^{なり}其^{その}
まは名^な孤^こ付^つりふよとて玄^{げん}上^{じやう}と書^かりといふ事^{こと}も有^あ
り唐^{たう}人の程^{ほど}程^{ほど}とてそり様^{さま}面^{めん}の思^しとて象^{しやう}孤^こも有^あ
りて玄^{げん}象^{しやう}といふ事^{こと}も昔^{むかし}より靈^{れい}物^{ぶつ}とて内^{うち}裏^{うら}燈^{とう}の
とれし人の事^{こと}もあはれあはれ形^{かたち}あり大^{おほ}をのしりて
の事^{こと}もぞうとて或^{ある}人^{ひと}の朱^{しゆ}雀^{せつ}門^{もん}の鬼^{おに}やわとて其^{その}
事^{こと}も是^{こゝ}程^{ほど}程^{ほど}とてあはれ修^{しゆ}は切^きられべ門^{もん}乃^{すなは}
とより頭^{かぶ}へ緒^{いと}を付^つて中^{ちゆう}をりてとてとてとて

今の世よこの道よいふ人ひんとすまじうあはれ
つり出くつりつり琵琶乃秘曲よいと云ふと流泉向子揚
真操咏あはれを名けて胡渭列三曲といふ也琵琶
乃名物なまものの玄象牧馬井手滑橋本絃元興寺小琵琶云
名是なあはれに付て坊子細わはれと略す

○（五）鳥羽隆淳阿十樂講乃次ついでり清遊せいゆうありきりお文家
まふん常しんも井りろろもくはれ敷兼刑部あつらのふき
季兼季乃井しんい筆葉吹くはる常れ音ねとらふ
似と調子の松ちり物公同音どうおんよ吹合ふきあとらり人々物
乃音ねととらり耳みみとらりふあらわふ或人笛ふえりて

胡老子といふ樂瓜吹合ふきあをるるなりて事さめてまり
筆葉しんれ小調子せうてうしといふ秘曲ひせきと吹んふとらりすいとらりて
あはれはゆり結むすつら長世ながよれ死しかりせが或人ある尸しるる松
乃存のぞんふれなりの角吹かくふとてさる不ふ是ぜやきるる人々あれた
是こゝろの管くだん絃げん乃道のちとよくかひかして不ふ知ちりつとてあはす人
ては我われであれどちりたさふりかきかはる物ものとてあは
と事ことなり

○（六）平歌へい基もとの世瓜よのう終はて上かみ秘曲ひせきいいるるわ終はりけりふ
死し曲せきの大おほ傍たがひ心こころ深ふか遠とほの三さん曲せきとていいるるの老らうは呼よびて
まらせまけいあはれゆりかきとあはるふよははる

はくはふつんとあむらにんしんをばくはく貴人乃
かく念はくあつて人給事なることさひてあむら西好
てあむらく見ぬ引傍心終く國くあむらびきんて
あむら花園より情くく目くは師の極樂れあむら
あむらのをさして引わりのえさるたものぬくの曲をば
えさるあむらやことかひくうさくいつくうさくてい
えさるせくばくはくくやみまうり楚くえさるり玉
撲く良工よちく執事く一給るよあむらぬは是坂と
さくろ棋禱く王良樂よあむらくう間くあむらぬそ
あむらあむらいつくあむら秘曲わりのと實よあむらさくんあ

いほうれと事にてく彼廣澤傍心乃理寛真言のいま
ぐに流泉味本瓜引てあむらとぬ一給よのいど

⑤醍醐乃橋會の童舞舞りろく事あむら深蓮と
つ僧とのたが將くとてみあむらてよく舞もか
くへく舞もてとくく瓜守路の家願よさるて思
あむらけくやあむら日あむらぬあむらゆりら

暗白とくすこの地は袖のてあむらうのぬて
あむらぬ一
あむらあむらぬ池の敷まれのけゆあむら枝たるん
とくあむらぬあむらぬあむらぬ

中院僧正の物は終ひくるが思はぬ因てし思はりして
同入道右府外對面の決り此事と語らましてやらしく
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
ひかどのあいるに終ひくるにあらしめてか將えか
つま順わらしけりしゆるふ

そのまゝにあらしめ神のあらはらしめ せららしめられたからい

くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか

ゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか
くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか

初めの功徳はならばとうと中にくらひしてききしに同

傍におりししれ遍船今の忠たまししれ似とぬと

さらとうりししれ遍船今の忠たまししれ似とぬと

あらわらししれ遍船今の忠たまししれ似とぬと

くもきくゆりしゆく有るに入道殿前の中におりてか將えか

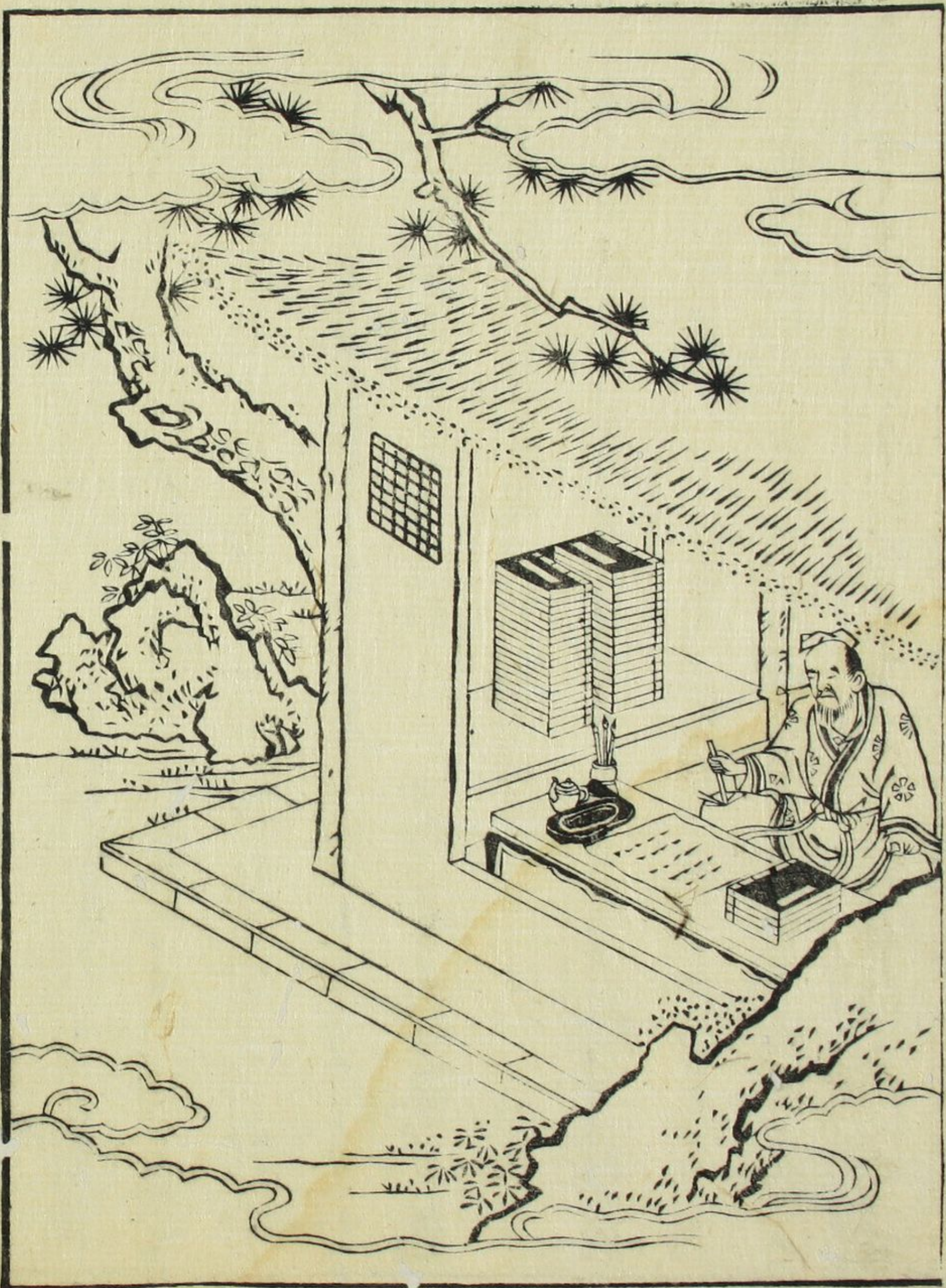
公高益益とあり和尚の殊勅の化作ちり

⑤ 抑人の才幹の思ろん

凡月のうけぬといはれしゆるといはれしゆ

唐大宗乃長王桂申といはれしゆるといはれしゆ

といはれしゆるといはれしゆ



ざんやしくそ故より蘊素のいもひんうて服をせざるか
 多し其業の惟とて外をえりてはあう又其宗
 貞親三年に好く孔子廟堂に立く周公且く孔子に
 先聖也とて教回を先師とせり是文をわくしつ故
 たり然則史書全経をもきびたり詞花翰棠とて各
 一をそて舊記よりあはれをたてて君道
 かけい身徳ともせん事實の要也但又次は乃
 人のさるる才藝にきよげともかきそのゆりく
 世よりあつ道よるそて第一乃終也さゆぐ
 ちづかむそそののくねと乃事也さけい相
 経より意盡

乃相去瓜つらてをらうまは但貪福ふよりなり

聖なま小長一条師大尹將兵濟時時子の六代はわたりて宗綱の子文内師綱

とつふ人ありまう白川院ははくろくごせろ才幹みんはかうを

けとむい人よ奉公わんされとて私とくうん忠ちんたうん

とて迎く下はつれりろの志ろいば方きん陸奥守ふ

さされはくれは彼國よりて換かんは瓜あまひくろに信しんまの

郡司ぐんじとて大庄司季春とつふ者これとさゆりげり國司

宣旨せんし瓜あまきりてとて人といふもんとはるやどん季春ふせんと

とらんごらよ試しり兵じつうの間合致あひあよ及びて國司方

り人ありておとらり國司ふといふもふありて事の由瓜

在國司基衛きゑふれり此事ねどいおせせとをさうき

とて國司のこしをどきけとてやういもぐとてはでさうら

くれは基衛さうらとて季春とよびてつらとてまといひ合

けりふま余あまにりて宣旨せんし瓜あまくうとて一矢いさの射かひいれこの

といひふと遠動えんどうのつらとてわどとて季春が頸くびを切く

早く國司のこしをどきけとてやういもぐとてはでさうら

季春が一向いつこうとて切く身を中とてとてあまぶと

といひふと遠動えんどうのつらとてわどとて季春が頸くびを切く

ら國司の返りしにりまらり例れいをた換かはせをたすけ

季春ふらの中よりりるのぶけにこそ存ぞんはつとかくやどら

根籍出来ませりてしむるをりりあはれ恐れしやといふに
基衡はゆふ及傳はば早検見と経く幸春が歌を切
てなるべと昔りあるひのひのけはくは是は幸春あり
幸春代は傳はる後見たるは乳子なり主人は下知り
よて志ぞとる幸春あり命と失するやせらにいとむく
まてけしむとく案じむらして我妻女は出立てよた
馬どもを先とてやゆくれ金鶴の羽縮布中の財物
ゆふをそ我い志くゆゆとて幸春が命は乞儀さるんがた
りゆ國司のゆふ人なる妻女目代とゆふいて幸春がさり
がくゆ使たるゆふを詞をけくしてゆふ被が命は乞

ゆふより目代執りて國司はゆふ腹をく幸春國司の身も
ゆふの僻事とゆふの公家ゆふの宰相ゆふの
科とゆふ小謀及ゆふの財とゆふをたれゆふをゆふ
君乃國司ゆふ其恐れゆふ人乃誅又ゆふをゆふ
まゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
けゆふゆふ頼國夏ゆふゆふゆふ馬ゆふゆふゆふ
ゆふゆふ見ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
指遣ゆふゆふゆふ基衡力ゆふゆふゆふゆふゆふ
子ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

申りはこれ國に者どもいつくらの孝春が命取たとき
これ小國司は贈^{せう}取の物一萬兩の金をさへとて一
かたこれ財也^{かんと}殆^た高國の一任の土貢にすむなり是
をい入給りて女にもいさはらげてつあふをさうと
まゝ國司の馬は多し人をさうとてわあめを
けるわらうたれに國併さびとてさういしてさへはる
ひよりま勢威^{せいゑ}愈^い希^きく乃國司よりさうこよあう
うりまきりほよ君國らくつみく清感^{せいかん}ありとて我
昔秦昭王の付孟嘗君^{まうじやうきん}中^{ちゆう}にたどがかりて死罪^{しざい}にあ
るべしけるふ其^{その}后^ご幸^{さい}姫^{ひめ}とてさへい^いに抗^{かう}白^{はく}奉^{ほう}命^{めい}を

アそ今^{いま}もたさうとてさうやどのわらうわんとい何の
賂^{まぐわい}もあうらけさうとてわらうとて其^{その}財^{さい}國^{こく}の外^{のうへ}
知^しらぬ時^{とき}王^{わう}乃^の公^{こう}なるまは后^ごに欲^{よく}の^の清^{せい}くさ
ぬん乃^のやどのわらうていつく國^{こく}王^{わう}乃^の后^ご宮^{みやう}に成^{なり}ま
る^るとわらう彼^{かの}義^ぎ家^か朝^{あそ}長^{ちやう}の隣^{りん}奥^{おく}守^{しゆ}に下^げ向^{かう}の付^{つき}子^こ細^{さい}
寄^よて家^か衛^{ゑい}武^ぶ衛^{ゑい}と責^せぐるに今^{いま}身^み義^ぎ老^{らう}乃^の弟^{てい}ホ孝^{かう}方^{ほう}
が款^{くわん}の館^{くわん}乃^の中^{ちゆう}によるにわらう出^いぬ金^{かね}を不^ふ取^とて送^{そう}し
ける小^{せう}詞^じはいつくさうとてび給^{たま}るは是^{こゝ}時^{とき}我^{われ}未^まが抽^ひぬつそ
か^かと給^{たま}るふ及^{およ}びばとていつく實^{まこと}うや孝^{かう}春^{しゆん}が同^{どう}に
後^ごま^まをい^いと一^{いつ}乃^のわらうま^まさう^{さう}有^ある國^{こく}司^し師^し綱^{かう}社^{しゃ}下^か

山林房之遊とて猿樂伎より多し南都
 此無僧そ有けるとて武勇を来やくた力孤身ひるあそ
 びもくろ合戦の日宗は是孤之のこくけき物具く
 ておむるに季春がほいあすくえより孤をていむご一矢
 も射ぬ先く鞭をわぢく後れよよにぢ入ふくると来
 らてつむり帰本にくろの國司これをあぢきりあ
 山林房の遊を改く先陣房の定了とぞけりき
 ぶ人の幾いより是孤はよ惠公傍都れ彼生要集ぬ
 人の定相をれ論を引て陣乃内の軍乃劔は強多
 くり水との月は浪乃勅静よ此随と書終つるこて

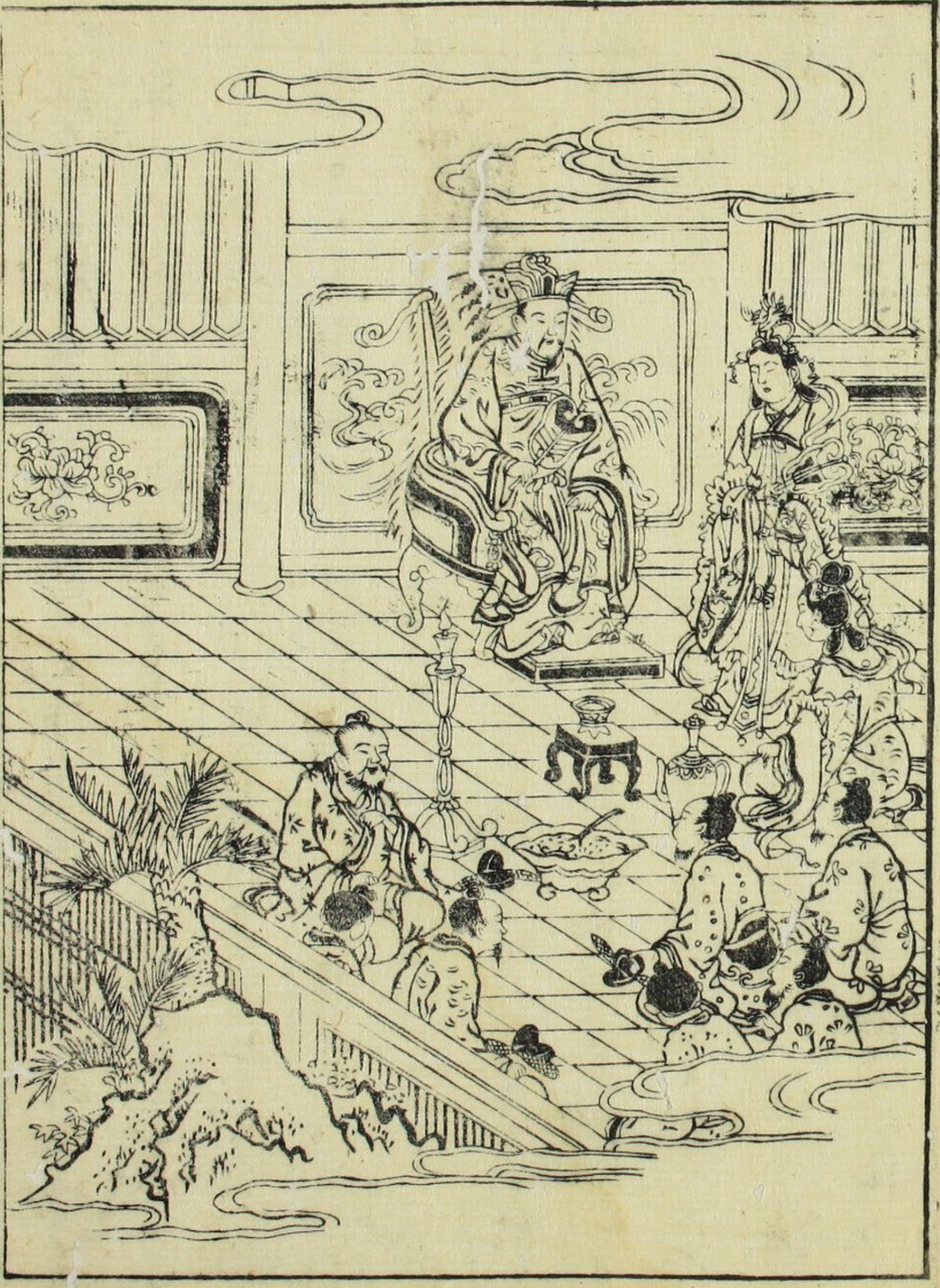
かり多しと心むあそ彼傍よりとがよと始より河をさ
 んとゆでいせいのざるとくんく梓季春國民よりあぐり國
 司孤射きり来罪科すぞに遠勅の者也あぢあめりさ
 あぶさゆいさけとび國司乃清廣はくく之章條れさ
 するあそり

番 朝成の檢非違使別當のくた中細き孤不中乃間
 石清水より諸我強盜百人が頸を切者也其切旁に
 了そ今度國司拜任とぞさより行へばさ青紙をたれ
 くれは社を云五社教生孤林抄し教生と宗明し
 仰りて事り此由紙下申哉と云く朝成重て云教生

を以て禁制の上と沙龍宣乃文明白也但件の院宣乃未
りる國家に長悪者也本の上は罪此限は付何事と
知我猶可申さる社を其有瓜合申向ける中納言
よ任畢ぬ此の自業自得の類は由るに憐愍の及不
るありげとて然面大納言不望内奉急とてげど悪
業に成りたり

⑤後冷泉院清和源中納言経衛に檢非違使別當
として十五年まで使廳を經たりたり或付た獄迫く炎上
ありて火とてに獄舎ぬけりたりける付檢非違
使乃犯人を可赦く由りたるに別當のさむいけるに帝

乃のさむ犯に同其罪よりて禁制の事人れあり
ありふありて天れありしりありたり其やと通
せん許し物とてうらむといふれは火迫くはさかいて
犯人音孤あむをせぬれさるふ天に同之地ぬれ勃く
るる也されだ終り出ばてされたりかけたり其後
別當被失より付の獄囚の音耳にありがぶるに
使ゆりてとて條終りぬらりげありきり其と守實所資
とて中納言もせたりたりありきりかどし其末絶り
たり是又はの理といふありきり下に悲愍をたぬの程
罪ありきり坂上允高の廷尉乃職と許しとて



終つるに格うられしより又大理惟もや犯人のをばさ
 獄舎のより城堀くあげおる事ありともどがさめに四面に土
 乃を屋と板とあり入りて立し終りけるも此を公のたを
 ろるやちまもさもう中うゆくれ思ふよりりの罪業乃因り
 り中よりれくサがひ
 まつる慈悲の刑のさういさの輕よ付ぐさのりは合
 乃定めりさうやさんい敷さうす取の咎程不窮て其
 類のさうん案いをれくい君めさう世乃さうさるるれ
 しもかゆづくい其罪とたさうらめん事人偏し徳改
 かりづく善た慈悲さるづく楚園のまれ櫻をほさう

かして修められぬくは終る世に越るは世にわたりし
又夏禹王の山河の罪を治すに天下の法を定め
しるしを定めしむるに天下の法を定めしむるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
中かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに

○(妻) 白河院清浄院九重の塔の金物を牛は皮として作る

とてまき世の國を修理する人定綱朝長事にあつべし
由ゆき多り佛師をたがへしとて人者必らなくまきしふは
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに
かたまたまの時勢業といふ文には夏禹王罪よあくる世
の多り四面の網と面を定めしむるに其を史記よるに

歌隆心ゆてとやのいれとて奥加育ぶともの也人乃罪

義平の比年將門軍團として謀反相うるゆりたる常
隆掾平貞盛以下野押領使藤兵衛秀郷等はけり
いしてあさしをさるるもわかれいざりしけしへ希後臣秋御
忠文を大將軍仰して今牙刑部が伴仲舒と副将
軍仰してとごさるるにいざりけりふさはは將門
うたふに道より伴希のうりこそ貞盛秀郷等ふ

勸賞と仰りし時忠文も同じく希後とさるるべきに
まは陣乃定有るりとのりて小野宮殿に一の座りて
うごがりま事といはるるにされし文有とて去りしは
してかみんとりされるるふ九條殿の次の座りて下着
ひまの道徳のてふいさる事とされども勅定よまごま
忠文のいさるむね刑乃うごがりしさいの終にざん貴の
うごがりし末のゆるむとそいりて曲禮乃みを引ぬ
りまのつれどもされの議り付てはくやんむりなれ
ども忠文との由詞累して富家の領をてい券契紙うさ
て九條殿よまのりいさるる終より侍と侍して一人は

市領方り小孫官殿をば恨まりて子孫を失りんと相云
先々秋より又丈に公資大外元と可憐と云ふるに
命議方て拜任より一りなりと云ふに依郷定ちと云
る小被申との意見に云公資の相模と懐抱して
秀奇案きんや小公事公嗣如き人々いつくしき
其詞小して云い公資とげど度くやわづらひける
りや相模の冷泉院侍所乃一両官の女房の名し侍
従也公資相模守より向の妻とすり小よりそ其身
わり史掃くもい奇よりんわらと云り
至事解由相公有國郷よりりしころ父老を手に具

して統世より方より何又俄に病臥受て死みけり
有國春山府君乃多公ははのぶく心を至して祈すり
るんの特ごり方て生るるて云我始魔王宮ふられ
るるふ美乗ちり心合とうわんよりいより返くはの
るるんよ由定あり小冥宮一人輔道をば入るるに
らるるやと云ふ有國ははちよりん其故の甚道村者
の故て其祭とけしむの料されよわげやりに
又度よ悪く人有國を何れその道は者もたを
の境と考考をいそと世をたつらてんは
あふつらばとりはる府の人と世よ何よりい

遠く飛ぶる也といひたり彼彼因感果の身品は其の身
 のよりやれまの付て彼其各別也況人同也やとん
 ら賞とていふ刑をいふとてとて悪悪をいふとて人事
 多かりといふ天意も違へ下の人らなるもいふ也や
 柳かよとのよの葉れよ一わにいつまら昔今其物結
 を集ちるる小其身のいれをいふ若のよにいつまら
 ばいづか煙もいふ名をいふとてとてとていふとてよ
 ちれいねとて世のあつてはとていふとてとていふと
 乃とていふとていふとて一夢也幻也といふ人志とて不帰し
 とていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 彼文選と

つまよ丹とていふとていふとていふとていふと
 わとていふとていふとていふとていふとていふと
 おり滝は老殿の信乃速く流れてとていふとていふと
 どういふとていふとていふとていふとていふと
 又水に返る垂は流年此後とていふとていふとていふと
 遺精山水とていふとていふとていふとていふと
 今よあつていふとていふとていふとていふとていふと
 うとのやまにいふとていふとていふとていふとていふと
 わとていふとていふとていふとていふとていふと

享保六年七月廿七日吉辰

揚陽 書堂礪野氏藏版



